

III 寄稿論文

総合人間学の課題と方法

III Contributions

Issues and Method for Synthetic Anthropology

現代社会とその人間観

—総合人間学のための試論—

Modern Society and its Views of Human Personality: An Essay on Synthetic Anthropology

三浦 永光

MIURA, Nagamitsu

目次

- | | |
|-------------------------------|---|
| 序 グローバル化と分裂—現代の危機複合体の中で | (4)人々の物質的消費偏重の価値観 |
| 1 四層的存在としての人間 | 4 全体的人間の回復と時代の危機の克服へ |
| 2 人間存在を構成する五つの根本条件 | (1)五つの条件の均衡回復 |
| (1)自然生態系の維持・保護 | (2)定常経済と地域経済圏の自立 |
| (2)経済—人間と自然の物質交換による生命と健康の維持活動 | (3)環境・資源問題への国際的・国内的取り組み |
| (3)倫理と法—政治的・社会的関係を律する原理の定立 | (4)自然・労働・協同にもとづく文化的活動 |
| (4)生の喜びと心の想いの表現としての文化的活動 | (5)宗教的な境域への想像力 |
| (5)宗教的境域の経験 | |
| 3 現代の危機とその原因の解明 | 序 グローバル化と分裂—現代の危機複合体の中で |
| (1)市場主義—企業の際限なき資本蓄積と競争の覇者への志向 | 現代世界はいくつものグローバルな問題に直面している。環境・資源問題、とくに地球温暖化と異常気象、国際的な貧富の格差と貧困・飢餓、地域紛争とテロ・難民、核戦争の脅威、原子力発電所事故の不安、世界人口の増加などである。発展途上国だけでなく、いわゆる先進工業諸国も多くの政治的、経済的、社会的難問を抱えている。これらのさまざまな問題に対して、学問はそれぞれの専門領域で問題 |
| (2)国家の経済成長政策と軍事力拡大政策 | |
| (3)科学技術の独走 | |

の原因と構造を解明し、問題克服の道を探求し、その成果を提示している。しかしそれにもかかわらず、現代の危機が解決の方向に向かう見通しはなかなか得られない。その原因のひとつは、現代の学問が高度に専門分化し、細分化していることにある。それぞれの専門分野での知識の蓄積が進めば進むほど、近接している分野の研究者の間でさえも相互の新たな研究成果を十分に知り理解する機会が少なくなる。個々の研究者はひたすら自己の専門分野での研究に埋没し、成果を上げることによって、その分野の学界で評価されることを目指すという状況が広がっている。これは自然科学だけでなく、社会科学においても人文科学においても言えると思われる。

そればかりではない。学問じたいが現代の危機を増幅する原因の一つとなっているという事実がある。たとえば、原子物理学の研究者がその成果を核兵器の開発に協力し、広島・長崎への原爆投下と大量殺りにくりに大きい役割を果たした。また原子力発電の技術は電力生産という目的をある程度果たしているが、いったん事故を起こせば、取り返しのつかない多大な人命の犠牲と大気・水・土壌などの環境的被害をもたらすことがチェルノブイリ事故と福島原発事故を通して明らかになった。さらに、農業化学が除草剤・殺虫剤・殺菌剤などの農薬を開発し、雑草・害虫の除去に大きい効果を発揮した反面、益虫や土壌中の有益な微生物をも消滅させ、作物中の農薬残留、水汚染をも引き起こし、さらにはそれが人体の中に入り、自閉症などの発達障害児の増加の原因となっている。また遺伝子組み換え技術によって育成された動物・植物が生産者・消費者の双方に多くの利点があるとして、すでに食品として市場に出回っているが、一部の学者からその食品としての安全性につ

いて危険性ありとの警告が発せられ、遺伝子組み換え食品反対の市民運動が国内外に起こっている。科学がある目的を達成するために開発した技術が、意図していなかった害悪と不安を他の分野で引き起こしているという皮肉な結果を招いている⁽¹⁾。

このような事態を乗り越えて、さまざまな学問が人類の永続的な存続という共通の目的から再出発し、社会の諸問題の真の解決に協力して取り組むことが強く求められている。筆者は相互交流の共通の場、フォーラムとして人間観または人間学を設定したい。現代社会がさまざまな分野で明示的または暗黙裡に前提している人間観、または望ましい人間（社会）生活の観念を明らかにし、それを再検討することである。各分野の研究者が自己の専門領域を超えて他の諸分野の知識を学び、異分野の研究者が相互に交流し、ともに現代の共通の課題の解決に向かって協力することは容易なことではないが、しかしそれが今、現代の喫緊の課題であろう。したがって現代の諸問題を考察する上で、人間をどう理解するかが議論の焦点をなすであろう。以下の考察はそのための一試論である。

1 四層的存在としての人間

まず、自然界における人間をどう位置づけるかという問いから始めよう。自然の進化は大まかに次の四つの段階に分けることができよう。すなわち、(1)元素、無機のおよび有機的化合物などの物質の状態、(2)生命の出現。栄養を外部から摂取し、自己を再生産し、繁殖する生命（植物）、(3)感覚・認知・運動の能力をもつ生命（動物）、(4)知的能力をもつ動物としての人間の出現である。

宇宙はその進化の四つの段階の結果として、大ま

かに分類して次の四種の存在から成り立っていると
思われる。すなわち、(1)物質。(2)生命(植物)。(3)
感覚・認知・運動の能力をもつ生命(動物)。(4)知
的能力をもつ動物(人間)である⁽²⁾。

人間はこれら四つの進化段階の成果を包含し、四
つの層から成る重層的存在として理解できる⁽³⁾。す
なわち、人間は生命と身体をもち、感覚と感情の能
力をもつと同時に、知的能力をもつ。

知的能力としては、おもに次の六種が挙げられる。

- (1)制作、技術⁽⁴⁾。人間は狩猟採集の時代以来、道
具を作り使用することによって生存の困難と障害
を乗り越える力を身に着けた。農業、それに必要
な道具と土木事業、都市建設、建築、交通・輸送
手段、武器の製作など、技術の発達は産業革命を
経て現代にいたるまで驚異的な進歩を遂げた。
- (2)言語と意思疎通(コミュニケーション)の能力。
人間は家族、社会、国際社会の一員であり、言語
を媒介として集団内の他者との意思疎通と協力、
意見の相違や緊張・対立を解決するために意思を
伝え合い議論することができる。また共に楽しみ、
交流を深めることによって相互の協同性と信頼を
確認し、絆を深めることによって安心と充実した
生活を送ることができる⁽⁵⁾。
- (3)巧知、または伶俐⁽⁶⁾。与えられた目標にうまく
到達する合目的的能力。自然の中で、また社会の
中で自己の生存のために必要な知を習得し、それ
を経験を通じてさらに発達させる能力。集団内の
経済・政治における自己利益のための合理的行動
もこれに含まれる。
- (4)学問的認識。自然科学および社会科学における
必然性と普遍性の認識を含む諸理論⁽⁷⁾。
- (5)知慮。事物の存在を認識する認知的思考とは別

に、行動または事柄を思量または勘考し、評価し、
決定する思考。個人として、また社会全体として
幸福のために必要な行為、規則、制度に関する思
量。政治、立法、司法、公共政策、市民組織の結
成・運営などに関わる知的能力⁽⁸⁾。

- (6)知恵。自然と自己と社会の調和を目指す包括的
思考。思想的(哲学的)または宗教的な世界観・
人生観を形成する能力、またそれにもとづく判断
力⁽⁹⁾。

2 人間存在を構成する五つの根本条件

上に見た重層的存在としての人間が生きていくた
めの、また人間にふさわしい生活を営むための必要
条件は何だろうか。それは基本的に次の五つの条件
であると思われる。

(1)自然生態系の維持・保護

人間が自然進化のある段階にいたって出現し、生
態系の一員として生きることを始めて以来、人間は
生態系の恩恵に恵まれると同時にその制約条件によ
って限界づけられつつ生存を続けている。人間は生
命有機体として太陽の光と熱、大気、水、土、鉱物、
多様な植物、動物が織りなす生命界のたえざる運動、
生成と消滅の世界の中で生きよう定められている。
この意味において、人間がこの生態系の運動と流れ
に沿って、その一員としてふさわしい生活と行動を
することが人間の生存の必要条件である。人間は自
然から生きる糧を得、衣と住の必要を満たしてはじ
めて生きることができる。とくに食糧に関しては、
人間は他の生物と同様に植物・動物という生物的資
源を摂取してはじめて生きることができる。生物的
自然資源は生命の経済の基礎であり、基本的経済価
値をもっている⁽¹⁰⁾。したがって、遠い将来にわた

って持続的・安定的に生きていくためには、自然資源を生み出す生態系を維持・保護しなければならない。このことは本来自明のことであるにもかかわらず、現代の成長経済の圧力の下ではしばしば忘れられ、「開発」の名の下に生態系が崩されつつある。国連委嘱の研究チーム「ミレニアム・エコシステム評価」は2005年、『ミレニアム・エコシステム評価報告書』を発表した。それによると、第一に、淡水、漁獲、大気・水の浄化、地域と地方の気候調節、自然災害や病害虫の制御などの生態系サービスが調査され、その24のサービスのうち15、すなわちおよそ60%が劣化し続けるか、または持続的でない仕方では使われている。第二に、生態系の改変は生態系を非直線的に（加速度的、突発的、不可逆的に）変化させている。第三に、生態系サービス劣化の悪影響を受けるのはとくに貧困層であり、人々の間の不公平や不均衡が貧困と社会的対立を引き起こす要因となっているという⁽¹¹⁾。

人類の歴史を振り返れば、古代ギリシャ、ローマ文明は森林の過度の伐採と土壌の疲弊・浸食によって終焉した。南米のマヤ文明は紀元前2000年頃に起こり、紀元800年頃の絶頂期を経て、紀元1000年頃に崩壊したが、その原因は焼き畑式農業による森林伐採と土壌浸食であった。デイビッド・モンゴメリーは現代のアメリカ合衆国、アフリカのサヘル、南米のアマゾン流域など世界各地で土壌の劣化と浸食が進行していることを指摘しつつ、「現代社会は、過去の文明の消滅を早めた過ちをくり返す危険を冒している」と警告している（モンゴメリー2010: 3）。

(2) 経済—人間と自然との物質交換による生命と健康の維持活動

人間が人間らしい生活を送るためには、まず生命と健康を維持することが必要である。そのためには、食糧をはじめとする衣、住の必要を満たす物資を得るための労働が重要である。社会的分業が高度に発達し、国の人口全体のうち都市人口の割合がきわめて高くなった今日、人間が自然と日常的に接触する機会が少なくなったが、そのような現代でも、社会全体として人々の衣食住の必要を満たすためには、人間と自然の物質交換、すなわち生産と消費が欠かせない。経済的価値は人間生活の本質的要素の一つである。しかし現代では経済的価値、とくに貨幣で表される経済的価値が最高の価値であるかのような通念が広まっている。企業の優劣が資本と生産額の大きさによって評価される傾向などはその例である。しかし、はたして経済的価値を支配する大資本がそれほど名誉ある存在であろうか。たとえば、ある大企業がある発展途上国で森林伐採を伴う開発事業で巨額の利益を得る陰で、森林とその周辺の住民が伐採によって住み処と生活の糧の源泉を奪われると訴え、反対運動の声を上げている事例を考えてみよう。このような事例は過去に世界各地で頻繁に見られたし、現在でも起こっている⁽¹²⁾。この企業は経済的価値を生み出すことに貢献している反面、現地住民の生活基盤を奪うという反倫理的行為を行っているのであり、また貴重な自然環境と資源を開発の名の下に破壊しているのである。経済的価値の追求は、人間存在を支える価値全体の視点に立つならば、他の価値、すなわち生態系の保護や、次にのべる倫理的価値を同時に満たしてはじめて有意義なものとなりうるのである。

(3) 倫理と法—政治的・社会的関係を律する原理の定立

人間は生物として生きようとする健全で正当な欲望をもっている。しかし人間は生きるために必要で十分な物資を得るにとどまらず、それを超える多大な財を獲得したいという強い欲望をもっている。そのために、ある集団が自己の居住地域の資源と環境（動物群・植生）を利用するだけでは満足せず、他の人間集団が居住し利用している領域を侵害し、奪い取ることが起こる。そこで集団内部でも、また集団相互の間でも、行動を律する取り決めと慣習を生み、次第に明白な規範を立て、どの集団もまたどの個人も安全に生存できるための制度を作った。こうして近代以後、西欧をはじめとして世界各地において個人の尊厳と社会的公正を規範とする政治体制と法体系が整えられてきた。

人間は社会的存在であり、社会を離れては生きていくことはできない。そして社会の中で生きるためには倫理と法が不可欠である。近代以前は支配権を力で勝ち取った者が法と倫理を一方向的に授け、服従を要求していたが、近代以降は人々が権力者の横暴を抑制し、みずから共同でその倫理と法の原理を制定し、みずからそれに従って社会生活を整序することが大勢となった。また既成の倫理と法が時代の変化に適合しなくなれば、相互の議論と合意によってそれを改める。このように人々が社会生活を維持していくための条件として、共通の規範を制定し順守することが必要である。

法は人間の外面的な行動を律する規範であり、違反行為に対しては処罰などの強制的措置を取る。法はその強制的措置を執行する政治的権力を前提条件とする。これに対して、倫理は法で禁止された行為を避けるだけでなく、困窮や貧困に苦しむ人々を援助する慈善行為や公正と正義のために貢献する行為

（徳行）を進んで行うことを求める。また倫理は外面的行為だけでなく、行為に伴う心の内面の善良さと動機の純粹さをも求める点で、法よりも要求度が高い。しかし倫理は公権力を背景として命ずるものではなく、自由で独立した個人または団体によって訴えるものであり、法がそなえている強制性をもたず、あくまで個人の自由に訴えかけ、自発的な実践を勧め、促すにとどまる⁽¹³⁾。

(4) 生の喜びと心の想いの表現としての文化的活動

人間が生活の中で経験する共歓、感動、歓喜。不幸の悲しみの共感と慰め。挫折感と孤独。陶酔、至福などの体験。願いと希望。そのような想いを表現する場は祭り、芸能、家族や親しい仲間同士の会食、演劇、音楽、舞踊、美術、工芸、文芸、言論・思想表現など、さまざまなジャンルで可能である。またそれは個人レベル、または仲間と共に、また共同体で体験される。さらに、その文化的体験は、人々が共同の美的経験に創造的に参加する、またはそのパフォーマンスあるいは作品を聴衆・観衆として観賞するという形でも行われる。さらに、その体験は陽気で賑やかなもの、または激しい強烈なもの、または静かで穏やかな経験でもありうるし、一時的なもの、または持続的なものでもありうる。要するに、この文化的・美的体験において、人間は身体と魂、情緒と思考、感情と理性が一つに融合する充実の瞬間を体験し、生きることの喜びと悲しみを深く実感し、それを昇華するのである。

(5) 宗教的境域の経験

人間は自分の生が身体的にも精神的にも安定した、確実なものでもないことを知らされる経験を、遅かれ早かれ持つ。たとえば、自分が身近な人の死に出会ったとき、そして自分がその人に生活上も心情的

にも支えられ、深く信頼していた場合、そのとき自分は自分の生活と存在じたいの半分を失ったような衝撃と悲しみを味わう。人は悲しみの中で今もなお愛する人と共にいたいという思いに駆られ、これまで過ごした日々の記憶がたえず繰り返し蘇ってくるばかりでなく、あたかも愛する人が今もまだ生きていて、自分がその人と共に親しく語り合っているような想念にとられる。自分がその想念の世界の中にあるとき、自分はもはや日常の世界にはいない。自分は親しい死者と言葉を交わすことができる別の世界、生者の魂と死者の魂が交流できる霊的な世界に移されているのである。筆者はその世界を宗教的な境域と呼ぶことにしたい⁽¹⁴⁾。

また人は自分が病気に罹るとき、自分の身体力の限界と弱さを深く感ずると同時に、自分の生命がいかにか不安定で崩れやすい諸条件の上に保たれているかを体験する。さらに、自分が徐々に年齢を重ね、自分の老いを実感するようになるとき、そしていつか来る死を自覚するとき、自己の生を超えた死後の時間はどのようなものだろうかと思いをめぐらさずにはいない。しかしそれは茫漠とした未知の世界である。ここでも人は宗教的な境域に立ち入ることになる。

人はこの世に生れて、苦しみに会いながらも喜びと慰めを経験し、そして死んでいく。その間の自己の生命は宇宙のさまざまな物質とエネルギーの有機的結合であり、一時的結合である。死によって、その結合は崩れ、元の物質に分解し、人は母なる大地に帰る。自分の魂と身体は宇宙における生と死の永遠の循環の中に入り、融合する。したがって、自分は死後、無に帰するのではない。自分の小さな生命は偉大な生命に抱き込まれ、土の中で再び新たな生

命の誕生に参加するのである。米国の農民作家ウェンデル・ベリーは土壌の不思議な力についてこういう。「土は死から生命を作っている。……死がほとんど万人から敵意をもって見られている時代に、われわれがその上に住む土地と、われわれが生きる生命が死からの贈り物にほかならないとは、信じがたいことである。だがそのとおりである。そしてそうしているのは表土である。じっさい、表土について語る時、宗教の言葉を回避することは困難である」。そして「死は過去が未来に入るための橋またはトンネルである」という（ベリー2008：183，237）。またM・エリアーデは世界各地の宗教儀礼の比較研究にもとづいてこういう。「死はすべての生命の根源との接触の更新である。我々はこの同一の基本的観念を、地母神と関連する[世界各地の]あらゆる信仰、および農耕儀礼のなかに見出す。死はたんに様式の変化であり、他の平面への過渡であり、万物の胎内への再統合である」（エリアーデ1984：176）。人は自己と大自然のそのような、いわば流動的な絆を洞察し、受け容れることによって、死の恐怖から解放され、平安を得る。またそのようにして不安と孤独の苦痛を克服できると思われる。

人間は日々の生活においても宗教的な境域に向き合うこともある。それは、自然の秩序と働きに対する畏敬または信頼を深く実感するときである。人間は自然の力が生み出した植物や動物を日々の糧として摂取することによって自己の生存を維持している。われわれは科学文明の力によって自然を征服し支配したおかげで便利で快適な生活を確保したと安心している。しかし、いかに高度な文明が発達した都市生活を送っていても、もしも突然の地震や台風や水害などの自然災害に襲われるならば、われわれは多

くの犠牲者や家屋の倒壊などに遭遇せざるをえない。大自然の測りがたい力の前で人間の卑小さ・弱さと自然への依存性をあらためて知らされる。

われわれの祖先は農業において天地のさまざまな力の働きによって作物の生育と稔りが得られることの不可思議と神秘、また天候の異変によって不作と災害が襲うことへの怖れを通して、自然に対して怖れと謙虚と敬虔の念を抱いてきた。農民として太陽の恵み、雨の恵み、土の神秘的な力が農作物を育ててくれることを神々に祈願しつつ働き、豊作の秋には神々に感謝して祝うという民俗宗教的な儀式と慣わしを代々続けてきた。その慣わしはつい数十年前、高度経済成長期が始まる1960年頃まで続いていたのである。その後、日本の農業人口が急速に減少の一途をたどるにつれて、また日本人の大部分が都市の生活様式に転換して以来、われわれは農山村の環境と農業の現場から遠ざかり、季節ごとに移り変わる田畑の景観、自然の恵みと自然の恐ろしさを身近に感じなくなったのである。自然に対する畏敬と感謝の感覚をたえず保持していたわれわれの祖先と、それをほとんど喪失した非宗教的な現代人と、どちらが人間をより深く、より総合的に理解しているかを考え直すべきときだと思われる。

誤解を避けるためにのべるならば、ここでいう宗教的なものは必ずしも既成の宗教とその教義、組織、歴史、儀式などに限定されない。既成の宗教の外部にいる人間が生活のいくつかの場面で突き当たる問題の中に宗教的境域が見えてくる可能性があるとのべたのである。ただし、その宗教的境域は現代社会に出現しているさまざまな新興宗教、オカルト宗教、また「精神世界」、「スピリチュアル」の名の下に宗教活動する運動や組織とは明確に区別されるべきも

のである。区別の判断基準は、ある宗教思想または運動が意思疎通（コミュニケーション）の開放性、科学的知識の承認、基本的人権の尊重、非暴力の原則を認めるかどうかであろう。

最後に、宗教の重要なテーマとして罪の問題がある。人はさまざまな罪に悩み、罪からの解放を求める。罪は自己個人の罪、自己が属する小さな集団の罪、自己の属する国の罪、また全世界の人間の罪などさまざまなレベルで意識されうる。人間は自己の利己的欲望とそれにもとづく行動のゆえに他の人々の生命・身体・自由・財産などを傷つけた結果、程度の差はあれ、何らかの罪意識にとられる。たしかに、現代社会では人間生活が高度に社会化され、生産・消費・教育・労働・娯楽などの生活の隅々まで集团的にシステム化されているため、過去の時代よりも自己自身の責任と罪責を明白に意識することが少なくなっている。しかし現代社会でも貧困や差別、またそれゆえの病気や心身の障害に苦しんでいる人々は依然として少なからず存在する。それら苦しんでいる人々は本人の責任のゆえというよりも、その苦しみの原因は激しい競争社会、競争を激化させている成長志向経済や学歴社会、また政治の貧困による大都市と地方の格差の影響のゆえに苦しんでいるという社会的要因が大きいと思われる。このように現代では罪の問題は政治的・経済的・社会的システムの中に隠された形で存在していると思われる。人間の利己的欲望とその集团的行動は一見中立的な制度と市場経済の背後で権益を求めて相争い、うごめいているといえよう。したがって罪の問題は、人々が社会の複雑な構造や国の政治・政策を意識的に明らかにしなければ浮かび上がってこないのである。さらに、国と国との間の貧富の格差、また軍事力の格差

が異なる国々の人々の生活状態、生命と安全に怯えている状態の原因を究明するならば、富裕な国、軍事的な強大国の国民は自己の罪責を意識化し、認識せざるをえないであろう。国内外の貧困・飢餓に苦しむ人々や難民は、豊かな国々の恵まれた階層の人々（われわれ日本人のかなりの部分を含む）のいわば構造的罪責の結果をゆえなくして担わされていると理解できるであろう。そしてそれら豊かな国の国民一人ひとりが、その罪責を少しでも減らす方向にコミュニケーションと行動を起こす責任を問われていると感ずるであろう。そのような意識化の中に現代の新しい宗教的な境域が存在すると思われる。

3 現代の危機とその原因の解明

序でのべたように、現代社会は複合的な危機に直面している。これらの危機の根本的原因として次の四つを取り上げ、その概略をのべてみよう。

(1)市場主義—企業の際限なき資本蓄積と競争の覇者への志向

市場経済では資本の規模が競争を決定する。大企業は資本の力によって有利に利益を得、資本を蓄積し、さらなる投資活動へと進むことができる。こうして大企業と中小企業の間には格差が広がり、寡占状態が生まれてくる。格差は勤労者の間、すなわち大企業の従業員と中小企業のそれとの間でも広がっている。これに非正規雇用や失業者を加えれば、社会全体の中の格差はいっそう拡大するであろう。さらに貧富の格差は国内ばかりでなく、国際社会においても起きている。先進工業諸国に拠点を置く巨大多国籍企業が世界の国境を自由を超えて投資・貿易を広げ、安い自然資源と安い労働力を買いあさり、利益を得ている。こうして豊かな国と貧しい国の富の

格差はますます拡大しつつある。

成長経済から来る歪みは製造業とサービス産業の繁栄と農林業の衰退という形でも現れている。市場経済では商工業・金融業が都市に集中する。またその周辺に消費経済が発達し、繁栄する。他方、農山村では貨幣経済の浸透によって、貨幣収入の必要が高まる一方、農産物・林産物の価格は市場を握る都市の大企業の圧力の下で不均衡なまでに低く抑えられる。その結果、農民はかつてのような自給的生活が困難になり、農山村の若者たちは仕事口を求めて都市に流れる。こうして都市人口が膨れ上がる一方で、農林業を担う農山村人口は急速に減少の一途をたどりつつある。

しかし農林業は人間の生存にとって不可欠の産業である。何よりも生命の糧を生産する農民が一定の割合で存在しなければ、社会生活は存続できないし、農業を営むためにはそれを支える森林の維持管理が必要である。農林業、商工業、その他のサービス産業の間に適切な均衡が保たれなければ、社会は安定して存続できない。産業構造を市場経済、とくに成長経済にゆだねるならば、冷遇されている農林業の担い手が減少することは避けられない。この問題は社会的分業または産業構造の偏頗性ともいえるべきものである。

以上に見た現代の市場経済、ことに成長経済において活動する経済主体としての人間を先述の人間の精神的能力の観点から見ると、彼らは自己利益を追求するために有効な巧知と技術の能力を最高度に高める一方で、社会の人々全体と自然を総合的に把握する学知、知慮、意思疎通の能力は遠ざけられている。また成長経済を支配する主体を人間存在の条件の観点から見れば、彼らはひたすら彼らの企業の自

己利益を追求し、その資本蓄積活動は限度を知らない。ヴェルナー・ゾンバルトは近代経済人の限界なき営利活動には「偏執狂的なもの」があるという。また彼らは法や慣習に縛られずに営利活動できる自由を要求し、「あらゆる他者との競争に打ち勝つ権利を求めている」。ゾンバルトによれば、彼らの心には「自分たち[の企業]が他の者よりも優位にあることを示すことができるという満足」、すなわち「権力への渴望」があるという(ゾンバルト 1990: 229, 235, 242。引用者が一部改訳)。企業は利益と資本の獲得競争でランキングの上位に昇ることを最高の目的としているのである。さらにそこから言えることは、企業人が人間的価値のうち経済的価値を最高に重視していることである。彼らは社会的公正と正義という倫理的問題よりももっぱら各人の行動の自由を主張する。また彼らは自然生態系の維持・保護に関して関心が薄く、自然を経済活動の手段、資源と見なすだけである。環境破壊と自然資源の減少という事態に対する責任は、過去数十年の歴史を見ても明らかなように、できるだけ回避する。企業人は文化的または宗教的価値の創造や享受に時間を費やすことにはあまり関心を抱かない。マックス・ウェーバーは20世紀初頭の欧米の資本主義社会に生きる経済人について次のように語っている。「精神のない専門人、心情のない享楽人。この空虚な人間は、人類がかつて到達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」(ウェーバー1989: 366。引用者が一部改訳)。「精神のない専門人」とは、組織(たとえば企業)の中で特定の細分化された役割を果たす義務に徹するあまり、精神、たとえば社会全体に対する自己および自己の企業の倫理的公正さと責任を自覚しない企業

人と理解できよう。「心情のない享楽人」とは、人並みの生活水準と通常の趣味や遊びは満喫しているが、真の意味の自分らしい満足(文化的活動を含む)、人生を振り返って後悔しないような永続的な充実感を欠いている人間の意であろう。ゾンバルトも、近代経済人の精神の中では「他のすべての[人間的]価値に対する[経済的]利益獲得の優位」が支配しており、「いかなる種類の拘束も、そして道徳的、美的、心情的な配慮も、その他いかなる配慮ももはやなくなった」という(ゾンバルト 1990: 242)。ここでいう「道徳的、美的、心情的な配慮」とは、本論文でいう人間存在の根本条件である倫理的価値や文化的価値の尊重と維持を意味しているであろう。そのような配慮と尊重が経済的利益追求の陰で失われる危険にあることを指摘しているのである。ウェーバーとゾンバルトの言葉は一世紀の時を超えて、今なお資本主義社会を人間学的な視角から批判し続ける鋭い洞察である。

(2) 国家の経済成長政策と軍事力拡大政策

国家とは人々が社会生活を営むさいに人々の生命、自由、平等、生存権、平和な生活などの基本的権利を保障するために設けられた機関である。しかし国家は必ずしもそのように機能してはいない。第一に、政府は国民の豊かな生活のためという目的を掲げて経済成長を最優先して重視する。しかし成長のためと称して大企業には法人税率を引き下げ、従業員を正規雇用から非正規雇用に転換することによって企業の負担を軽減する「改革」を断行する。労働者の賃金を下げ、その地位を不安定にし、失業者を増やす結果となっている。政府は大資本を優遇することによって国内総生産を高めようとするが、そのために勤労者大衆が犠牲にされている。また製品輸出を

促進して GDP を増大させるためにも、財政政策によって大企業を後押しする。第二に、中央集権化と企業の大都市集中の傾向の結果、地方の人口が激減し、地方都市と農山村が衰退している。若者が仕事を求めて大都市に集中した結果である。また政府はエネルギー政策として原発を全国各地に建設し運営させているが、福島原発事故が発生した後の今日でもなお原発に固執し、それを維持しようとしている。原発を大都市から遠い辺地に建設し、事故の被害が大都市の企業と市民に及ばないように配慮しつつ、原発周辺の住民には事故の被害を受忍させる政策である。第三に、国家の軍事優先の対外政策である。対外的に自国の国家主権を不可侵なものとして主張し、周辺地域における自国の存在感を高め、覇権を競うために、軍事力と戦争体制をたえず強化しようとする。軍事優先の対外政策の背後にあるのは、(すべての、または特定の) 外国を恐怖と不信の目で見、相手国が覇権拡大的で、攻撃的・好戦的だとする敵国イメージである。相手国もわが国と同様に国内にいろいろな問題を抱え、周辺諸国と平和友好関係を築きたいと思いつつも、同時にわが国に対して警戒心を抱かざるをえないのだろうとは想像できない。相互の不信感が両国の関係をいっそう緊張させてしまうという悪循環を見ようとはしない。他方で、国際的緊張を和らげるための、平和的・文化的友好的関係を築く努力の重要性を軽視する。ここにも一面的な国家観と人間観が潜んでいる。

要するに、国民大多数の人々の自由、平等、生存権、平和な生活という基本的権利をないがしろにした現代版富国強兵政策である。しかしこの政策は安全保障と防衛の名の下にかえって周辺地域諸国間の緊張とリスクを高めるであろう。

以上のような国家の政策の特徴を先述の人間の精神的能力の観点から見ると、技術と巧知の能力を過大に重視し、学知、知慮、意思疎通を軽視していることが明白である。

またその特徴を上述の人間存在の根本条件の観点から見ると、経済(富の増大)と自己利益の価値が突出して重視されている。しかし経済政策における成長志向は環境・資源の問題とリスクを必然的にはらむことが認識されず、矛盾を抱えている。また上述の国家政策の特徴は倫理的価値(公正)と個人の尊厳と基本的権利(とくに下層勤労者・弱者の権利)がおろそかにされている。

(3) 科学技術の独走

科学技術は上述の精神的能力のうち学知に依拠しつつ、製作・技術と巧知に集中し特化されている。科学技術が人類の歴史の中で人間生活の諸領域において多大な恩恵をもたらしたことは疑いない。だが技術が高度に発達するにつれて、その力が破壊力をも帯びてきた結果、技術の否定的な側面が目立つようになった。それはどのような要因にもとづくのであろうか。

現代の科学者・技術者はおもに国家または企業の庇護の下で研究開発に従事している。彼らは国家または企業の要請に応えなければならない。技術の目的は国家または企業が決定する。それはおもに経済成長、営利による資本の蓄積、軍事力強化などの目的である。現代の科学技術は高度に専門分化しているので、先述のように、個々の技術者は自己の専門以外の分野の価値の重要性を判断する能力を欠いていることが多く、自己の分野の研究と他の分野の研究がどのように関係しているのかも十分に把握できないことが多い。

たとえば、国家が軍事的目的のために破壊力に優れた新型の武器の開発を技術者に要請する場合、技術者はその武器の開発がどのような結果をもたらすか、その破壊力は残虐で非人道的ではないか、犠牲者はどのくらいの数に上るのか、それは本当に世界の平和に役立つのかなどについて検討することは期待されていない。いや、技術者がもしそのような検討をすれば、彼は国家にとってけむたい存在として敬遠され、邪魔者扱いされるであろう。だから、彼が優れた技術専門家として認められるためには、自分の研究がどのような目的に利用され、それが倫理的に許されるかという問題には深入りせず、たんなる技術者、組織の一員として自己の使命に徹しようとするであろう。たしかに、自己の研究活動に道徳的な疑念を覚えて、辞職する技術者もいるかもしれない。しかしそれは例外的な事例であり、大部分の技術者は自分に課せられた課題にかすかな疑念を感じたとしても、課題の遂行に専念するであろう。問題は、根本的には、科学技術をこのような目的のために利用する国家をどのように民主主義的にコントロールするかである。科学技術者については、科学技術者が個人として、また集団として自己の専門に埋没することなく、自己を広く市民として倫理的にも責任を負う独立した研究者であるために、何が必要であるかが問われなければならない。

(4) 人々の物質的消費偏重の価値観

市場経済は需要と供給の相互作用によって動的に発展していく。その上、産業革命以後、化石燃料エネルギーの利用という幸運と産業機械の発明に支えられて、生産力の飛躍的発展が進行した。生産力が増大すれば、供給の増大によって欲望、すなわち需要がさらに膨らむ。それに応えて生産と供給が刺

激され、市場の規模がいっそう拡大する。このように市場経済は近代以後、基本的に生産と需要の双方の成長を伴って今日に至っている。現代の先進諸国における大量消費経済は、消費者大衆の消費への欲望に支えられているのである。そうだとすれば、先に指摘した成長経済による貧富の格差という倫理的問題と環境の悪化および資源の枯渇という問題の責任は、生産・供給の側にのみ帰せられるべきことではなく、需要と消費の主体である一般消費者にも問われなければならないであろう。ただし、大量消費を享受しているのは社会のすべての階層ではない。下層の人々と地方の人々は繁栄の恩恵に与ることができないでいる現実が問われなければならないであろう。また人間存在の根本条件の一つとして先に挙げた人間の生存基盤としての自然生態系の維持・保護は、地球温暖化という脅威が迫っているにもかかわらず、たえざる経済成長のかけ声のもとで公共の議論の場の片隅に押しやられている。先に触れたM・ウェーバーの「心情のない享楽人」はこのような状況の中で物質的消費偏重の価値観にとらわれている一般消費者にこそもっともよく当てはまるであろう。

4 全体的人間の回復と時代の危機の克服へ

前節まで見てきた現代の危機と人間観の問題を解決の方向へ転換するためには、次の四つの原則を立てることが重要であると思われる。

(1) 五つの根本条件の均衡回復

前節で現代の危機の四つの主要な原因、すなわち大企業の資本蓄積と支配による不公正と貧困問題、国家の経済成長政策と軍事力拡大の対外政策、科学技術の独走、人々の物質的消費偏重の価値観を見て

きた。これらの原因を2節で挙げた人間存在の五つの根本条件に照らして見るならば、これらの原因はどれも経済的価値を過大視していることが明らかになる。たしかに人間生活にとって物質的消費は不可欠の要素であるが、人間は消費を増せば増すほど、それだけ幸福感が増すわけでもなく、消費だけで満足できる存在でもない。「人はパンだけで生きるものではない」(イエス)と言われるとおりである。人間は他の四つの条件、すなわち自然生態系の維持、政治的・社会的公正、文化的活動、宗教的境域の経験のうちの一つでも欠けるならば、身体的にも、社会的にも、精神的にも人間らしい、十全な生活を営むことはできず、また将来にわたって永続的に存続することもできないであろう。したがって貨幣的富の獲得の過大視、市場経済の競争および国家間の覇権争いの過度の激化を抑制すると同時に、他の四つの条件を復権させ、五つの条件の間に適切なバランスを回復することが必要なのである⁽¹⁵⁾。そのため開かれた議論の場を設け、活発な議論を展開すること、また市民運動とそのグローバルな連携が必要であろう。

(2) 定常経済と地域経済圏の自立

さらに、先の四つの原因の主体である経済界、国家、一般消費者は市場経済における競争の激化の中で国内的にも国際的にも貧富の格差を広げ、貧困・飢餓と失業をどのように克服するかという政治的・倫理的課題を問われている。経済界と多くの経済学者は、企業の経済活動には自由が保障されるべきであり、格差と不平等の問題は経済(学)の範囲外の事柄であって、自分たちが政治・倫理の問題に責任を負う必要はないと考えている。しかしそのような経済(学)の定義は根拠に乏しく、「自由」の濫用

にほかならない。人間にとって経済活動は必要不可欠なものであるが、それは自然生態系の基礎の上のみ成り立っているのであり、また他者を困窮と貧困に追いやって放置することは共同体的・倫理的存在としての人間にふさわしいことではない。経済活動は人間生活の根本条件の一つにすぎず、他の条件、とくに公正・平等の倫理を排除するのではなく、それを受容し、その範囲内で自由を認められると理解すべきであろう。市場経済に適切な枠組みを設定すること、貿易・国際投資はいつそう自由化されるのではなく、むしろ必要最小限にとどめることが肝要であろう。

成長経済に関しては、これを定常経済に転換することが環境的・社会的破局を回避するための唯一の道である。定常経済とは、人間が生活のために自然界から取り出す自然資源の量を毎年増大させる(成長経済)のではなく、つねに基本的に同じ水準にとどめ、その範囲内で生活を営むことである。自然が毎年生み出す生物資源は、世界全体レベルでも地域レベルでも、一定の限界があるから、人間はその限界内で生きてはじめて、将来にわたって安定した存続を保障されるのである。

定常経済を確かなものにするためには、経済規模を現在の国家単位のものから地域社会単位とするものへと縮小することが必要かつ有効であろう。地域社会が地域の自然資源を利用すると同時に維持・保護する。再生可能エネルギーも地元の資源を利用して自給する方策を見出すのである。地域の農林水産業を基礎に据え、それとの関連で工業が発展し、地域の都市が文化的活動の交流の場を提供する。農民と市民、生産者と消費者が提携し、相互に支え合う関係を作る。そうすれば、国の中央の大資本や外国

資本の圧力に対抗する力を増すであろう。

(3)環境・資源問題への国際的・国内的取り組み

先の四つの原因は環境・資源問題に対する関心が希薄であることでも一致している。というよりも、これら四つの原因はまさに環境・資源問題を引き起こす根源にほかならない。それらは経済的価値の追求のために環境・資源を大量に消費している。しかも生産のたえざる成長の要請を自らに課し、それを競争の激化の中で遂行するならば、資源消費は毎年増大し続け、環境の荒廃はいっそう拡大し、環境・資源の維持・保護に対して配慮する余地はほとんどない。しかしこのような状態をいつまでも続けることはできない。このままでは早晚、経済自体が破局にいたることが明白である。この問題は1970年代から警鐘が鳴らされているにもかかわらず、国家も経済界も一般消費者もなかなか転換に向かおうとはしなかった。しかし地球温暖化の危機が現実になるに及んで、ようやく2015年に地球温暖化防止のための国際的なパリ協定が合意され、その後発効したことが転換への第一歩となった。この転換を確かなものにするためには、自然生態系の維持・保護が人間の生存基盤であるということをあらためて確認し、そのために生産・消費・技術開発のあり方を根本的に見直し、成長経済から定常経済へ、将来性のない化石および原子力エネルギーから持続性のある再生可能エネルギーへの転換を遂行することが国家、経済界、一般市民に求められている。

(4)自然・労働・協同にもとづく文化的活動

先の四つの原因（主体に即して言えば、企業、国家、消費者）がある程度重視しているのが、人間存在の根本条件のうち、文化的活動であろう。ただし、企業、国家、多数の消費者が重視する文化的活動は

2節で説明したものとはやや異なった意味で理解されていると思われる。先に挙げた文化活動は人間存在の第一の条件である自然生態系の維持・保護と、第二の条件である公正の倫理を前提した上での生の享受としての喜びであり共歓の表現であった。しかし四つの原因の行為主体はいずれも自然の維持・保護とそれにもとづく生産活動（農林業）からかけ離れた位置（都市）での資源の消費的、いや浪費的な使用にもとづく楽しみという意味での文化的活動に傾いている。真の意味での文化的表現は地域の豊かで動的な自然と地域の人々の労働と協同関係から生まれてくるものであろう。そこで生まれた芸術表現と作品は人間存在のすべての条件を包括する総合的表現であり、したがって地域、民族の境界を超え、また時代の隔たりを超えて理解され、共感されるものであるに違いない。

(5)宗教的な境域への想像力

最後に、人間存在の根本条件の一つである宗教的なものへの想像力とその現代的意味についてのべてみたい。すでに2節においてのべたように、人間存在の脆弱さと自然の力への本質的依存性は現代の科学文明の恩恵を受けている先進国の現代人についても依然として当てはまる。それは最近の地震、津波、水害などによる多数の生命の犠牲と被害を思い起こせば、明白であろう。自然の力は人間に多大な恩恵をもたらす一方で、予想外の恐るべき災厄をも引き起こす。しかしそれでもなお、人間は自然の中で、自然の力に頼りつつ生きるしか道はない。そのことを洞察するならば、人間は大自然への怖れと敬意、謙虚と信頼・感謝の念を抱かずにはいられないであろう。そこから、われわれの祖先が長い間、自然の神々を敬ってきた理由が理解できるのである。

ところが、現代では大部分の人々が便利で快適な都市生活を送り、大量消費を享受している一方で、その代償として環境破壊と資源の減少が急速に進行している。そのため1980年代以後、「持続可能な」経済という言葉が声高に語られるようになった。しかしこれは裏返せば、現在の資本主義経済の現実が持続不可能であり、資本主義が人類の存続をも気にかけない刹那主義的なものになっていることを意味している。現代の人間が自然を人間のためのたんなる手段、無尽蔵にある「資源」と見なし、無遠慮に、飽くことなく消費し、破壊している姿は、われわれの祖先から見れば、自然の神々に対する冒瀆、「罰当たり」な行為と映るであろう。これを現代的に言い換えれば、現代のわれわれは長い人類史のうちのほんのひと時の浪費的繁栄のためにわれわれの生存基盤をみずから突き崩し、将来世代が生存できないような自殺行為を犯しているのである。われわれはとかく宗教を過去の遺物として軽視しがちであるが、自然の神々を信仰し崇拝していた祖先のほうが現代の人間の自然に対する態度の異常さを的確に見抜くことができるのではないだろうか。

宗教とは既成の宗教、その経典、教義、儀式、宗教組織に限られるものではなく、広く自然の力と恵みに対する畏敬と謙虚、信頼と感謝と祈りの態度、また自然の秩序に適合し協力するような簡素な暮らし方、子孫が永続的に存続し繁栄することを可能にし、配慮する生き方を意味するものであろう。その意味では、すべての人間が、意識するとせざるとにかかわらず、宗教的境域に囲まれて生きているとも言えるのである。宗教的境域を経験するために求められるのが先述の人間の精神的能力の一つである知恵の涵養であらう。知恵は自然と自己と社会を包括

的に捉え、時空の狭い限界を超えた視点から自己と社会のあり方を眺め、現実に対処する道である。

注

(1)小林直樹氏は学問が現代の危機の要因の一つになっていることを指摘し、「知の閉塞・誤用・頹廃」について論じている（小林直樹2007）。

(2)シューマッハーは世界が四つの「存在の次元」から成るという（シューマッハー1980：第二章）。これに対して、小林直樹氏は進化の大きな三段階として物質→生命→精神を提示している。この三段階の発展図式はJ・S・ハクスリー、A・コンフォート、P・クラウド、渡辺格、K・ポールディングらがとってきたものだという（小林直樹2006）。この三段階説が筆者の四段階説と異なるのは、生命の段階を植物と動物に分けるか、あるいは両者を一括して生命とするかの違いであり、さほど大きい相違ではない。

(3)このように四種に分類する発想はアリストテレスとE・フリッツ・シューマッハーおよび進化論から示唆を得ている。アリストテレスはもちろん近代の進化論を知らないのだが、彼の原因論と靈魂論は右にのべた四種の存在から成る宇宙観をもっていたと理解することができる。すなわち彼は『形而上学』において自然界の四種の基本的原因の一つとして質料因、すなわち物質を挙げている（アリストテレス1987：上巻31）。また『靈魂論』において、生きものの世界を植物界、動物界、人間界に分類し、人間を理性的動物と規定している（アリストテレス1968：42-46）。シューマッハーは宇宙が物質、植物としての生命、動物としての生命、精神をもつ生命としての人間、の四種の存在からなるとのべてい

る（シューマッハー1980：32 - 45）。

(4) アリストテレスは人間の知的な能力の一つとして技術（*techne*）を挙げている（アリストテレス1980：上巻222 - 3）。

(5) カッシーラー1973，ハーバーマス1985 - 87 参照。

(6) アリストテレスは伶俐（*deinotes*）を「与えられた目標へ導くべき諸般のことを行って首尾よくこの目標に到達しうる能力」と規定している（アリストテレス1980：244 - 5）。

(7) アリストテレスは学知（*episteme*）を必然的なものごとの知であり，論証可能なものとのべている（同上220 - 1）。学知は理性によって認識されるものと理解できよう。

(8) アリストテレスは，知慮（*phronesis*）とはもろもろの善のうち，最善のものを思量と勘考にもとづいて到達する力であり，政治，立法，司法，種々の評議，家政において働く能力であるという（同上230 - 4）。

(9) アリストテレスは知恵（*sophia*）を最も尊貴なもの，神的なものに関する学と規定している（同上227 - 230）。筆者は知恵をこれよりも広く自然，自己，社会を包括的に捉える知と捉えたい。ルイス・マンフォードは紀元前6世紀から紀元1世紀頃の間に人間の宗教的・道徳的性格に深い変化が起こった事実を「基軸宗教人」「基軸哲学者」の出現としてのべている（マンフォード1978：上巻125 - 179）。これは私が本論文において「知恵」と呼ぶ人間の精神的能力の目覚めが起こった歴史的背景の適切な説明として理解できる。またシューマッハーは知恵（*wisdom*）についてこういう。「知恵は [近代以降一引用者注] 無視されるどころか，拒否

されてきたので，知識人の多くが，知恵とは何かについてほとんどわからなくなってしまった」。「では，知恵とは何だろうか。どこにそれを求めたらいいのだろうか。……それは各人の心の中にしか求められない。知恵を求めるには，貪欲と羨望という，今自分を支配しているものを捨てなければならない」

（シューマッハー1986：48 - 49。引用者が一部改訳）。

(10) N・ジョージェスク・レーゲンは，人間の生命経済の維持にとって自然資源が必要不可欠であることをエントロピー法則によって説明している。（ジョージェスク・レーゲン1993：とくに序および第10章）。

(11) 国連ミレニアムエコシステム評価 2007：1 - 2。

(12) たとえば次の二つの Website を参照。

<http://amazonwatch.org/news> および <http://www.jatan.org>

(13) カント1972：340 - 41。カント1976：29 - 42 参照。

(14) ロジェ・カイヨワは「俗なるもの」と「聖なるもの」についてこういう。人は安定した安全な生活（俗なるもの）を追求しているが，生は消耗であり衰退であるから，俗なるものにいつまでも留まっていることはできない。平穏無事な生活の出口は聖なるものの入り口である，という（カイヨワ1994：203 - 209）。本論文の筆者のいう「宗教的境界」はカイヨワのいう「聖なるもの」に近い。

(15) L・マンフォードは第二次世界大戦の最中に書かれた『人間の条件』において，大戦の混乱と悲惨さの原因が経済，領土，人口の拡大と発展にあると論じた上で，文明の再生が均衡のとれた人格，均衡のとれた経済，均衡のとれた社会の達成にかかって

いるとのべている（マンフォード 1971：397 - 429）。

参考文献

アリストテレス（1987）『形而上学』，出隆訳，岩波文庫

アリストテレス（1968）『靈魂論』，アリストテレス全集 6，山本光雄訳，岩波書店

アリストテレス（1980）『ニコマコス倫理学』，上・下巻，高田三郎訳，岩波文庫

M・ウェーバー（1989）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，大塚久雄訳，岩波文庫

M・エリアーデ（1984）『大地・農耕・女性—比較宗教類型論』，堀一郎訳，未来社

R・カイヨワ（1994）『人間と聖なるもの』，塚原史ほか訳，せりか書房

T・カーター／V・G・デール（1975）『土と文明』，山路健訳，家の光協会

E・カッシーラー（1973）『人間』，宮城音弥訳，岩波書店

I・カント（1972）「人倫の形而上学〈法論〉」『カント』，世界の名著 32，加藤新平ほか訳，中央公論社

I・カント（1976）「世界公民的見地における一般史の構想」『啓蒙とは何か』，篠田英雄訳，岩波文庫

国連ミレニアム・エコシステム評価編（2007）『生態系サービスと人類の将来』，横浜国立大学 21 世紀 COE 翻訳委員会訳，オーム社

小林直樹（2006）「総合人間学の課題と方法」，小林直樹編『総合人間学の試み—新しい人間学に向けて』，学文社

小林直樹（2007）「現代における知の頽廃と再生」，総合人間学会編『人間はどこにいくのか』，学文社

E・F・シューマッハー（1980）『混迷の時代を超えて—人間復興の哲学』，小島慶三ほか訳，佑学社

E・F・シューマッハー（1986）『スモール・イズ・ビューティフル—人間中心の経済学』，小島慶三ほか訳，講談社文庫

N・ジョージesk・レーゲン（1993）『エントロピー法則と経済過程』，高橋正立ほか訳，みすず書房

J・セイモア—H・ジラルデット（1988）『遙かなる楽園』，加藤迪ほか訳，日本放送協会

W・ゾンバルト（1990）『ブルジョワ近代経済人の精神史』，金森誠也訳，中央公論社

花崎阜平（2010）『田中正造と民衆思想の継承』，七つ森書館

J・ハーバーマス（1985 - 87）『コミュニケーション的行為の理論』，河上倫逸ほか訳，未来社

W・ベリー（2008）『ウェンデル・ベリーの環境思想—農的生活のすすめ』，加藤貞通訳，昭和堂

L・マンフォード（1971）『人間の条件』，生田勉訳，弘文堂

L・マンフォード（1978）『人間—過去・現在・未来』，久野収訳，上下巻，岩波新書

三浦永光（2015）「E・F・シューマッハーの現代経済学批判と〈超経済学〉の構想」，総合人間学会編オンラインジャーナル『総合人間学』第 9 号 117 - 127 頁

D・モントゴメリー（2010）『土の文明史』，片岡夏実訳，築地書館

[みうら ながみつ／津田塾大学名誉教授
／哲学・社会思想史]